

PATAILLE

Domaine Sylvain Pataille
ドメーヌ・シルヴァン・パタイユ

Racines 

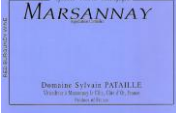
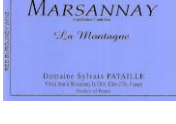
シルヴァン・パタイユは、マルサネの地で20haの畑を管理し、ピノ・ノワール、シャルドネ、アリゴテを栽培する。ボルドーで醸造学を修めた後、コンサルタントとしての経験を積み、1999年に祖父の畑を受け継いで独立。2007年にバイオロジック農法を開始し、翌年には全ての畑をバイオダイナミックへ転換した。セラーは村内に点在し、少しずつ統合を進めながら、伝統を守りつつも進化を続ける。2013年から全キュヴェで亜硫酸無添加醸造に挑戦し、果皮の成熟を見極めながら、長いマセレーションと熟成を経て、ピュアなブルゴーニュを追求する。一時期は醸造学校でも教鞭をとり、現在もブルゴーニュの10社で醸造コンサルタントとして活動しており、近代醸造学の理解も深い。自社の畑では丁寧な畑仕事とセラーでの時間をかけた醸造が生み出すワインは、土地の個性を映し出し、現代らしい介入の少ないアプローチでありながらクラシックな雰囲気を備え、今後のブルゴーニュの可能性を感じさせるワインを生産する。

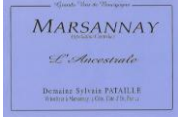
2024	降雨量自体が多いわけではなく、少量の雨が絶え間なく降り続いた日照量の少ない年。
2023	前年のように暑い年だったが、雨は適度に降った。
2022	非常に暑く、乾燥した年だった。
2021	4月の霜害が深刻で、シャルドネもアリゴテもほぼ同時に発芽したものの、ほとんどの芽が被害を受けた。夏に向けてどのように推移するか、祈るしかない状況であった。
2020	花ぶるいと水不足が収量減の大きな要因となった。全体の収量は10〜20hl/ha程度と少なかった。コート・ド・ニュイ全体でも収穫量が少ない年であったが、特に白ワインが優れた年となった。赤ワインはまだ閉じた状態にあるが、果皮由来の成分がしっかりと抽出されており、熟成に適した良いヴィンテージである。
2019	2018〜2020の3つのヴィンテージの中では、比較的早く飲めるワインとなった。熟成向きのワインでありながら、すぐに飲んでもおいしい「Vin de garde à boire tout de suite」という表現は冗談ではあるが、悪くない年であった。
2018	2018、2019、2020の3年間は同様の気候パターンで、高温と渇水ストレスが顕著であった。高温よりも水不足の影響が深刻で、ブドウ樹の実付きは少なく、果実の成熟は緩やかであった。また、葉も多く失われた。発酵の進行はここ最近のヴィンテージの中で最も遅かった。

○Bourgogne Aligoté ブルゴーニュ・アリゴテ				備考	シャン・フォレとレ・ゾヴォンヌの畑の買いブドウ。マルサネ村にはシルヴァン所有の畑だけでなくとも、アリゴテの古樹が残る。アリゴテの農家を買収するためにも、シルヴァンは本キュヴェを造り続ける。エントリーレベルのアリゴテながら、単純さはなく、複雑味を備えている。
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 植樹：1930年代〜1961年 位置：標高250m、東向き 土壌：粘土、泥炭岩、石灰岩、砂利	醸造		
○Bourgogne Aligoté - Les Auvonnes au Pépé ブルゴーニュ・アリゴテ レ・ゾヴォンヌ・オ・ペペ				備考	Auvonnesとは方言で、カラス麦を意味するので、古くはカラス麦畑であった可能性も。シルヴァンが祖父（pepe）から引き継いだ畑で、マルサネの村にも近く、バランス型のワインに仕上がるが、還元香ともいえる、鉱物的な香りが特徴。
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 植樹：1930年代 位置：標高250m、東向き 土壌：粘土、泥炭岩	醸造		

	○Bourgogne Aligoté - Champ Forey ブルゴーニュ・アリゴテ シャン・フォレ			備考	石の多い“熱い”テロワールで、収穫時期も早い区画。斜面の下の方にあり、茶色い表土は3-4mほどだが、小石を多く含むので排水性がある。アプリコット、洋ナシのようなニュアンスが出やすい。
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 植樹：1932～1961年 位置：標高250m、東向き 土壌：石灰岩、砂利	醸造		
	○Bourgogne Aligoté - Clos du Roy ブルゴーニュ・アリゴテ クロ・デュ・ロワ			備考	デижョンに隣接する、シュノーヴ村の畑で、マルサネ地区の中で元も北にあるリュウ・ディの一つ。その名の通り、地域の公爵が所有していた区画。樹齢も最も高くグレーズ・リテと呼ばれる小石の堆積層で、爪くらいの大きさの小石がちりばめられている。石の多い“熱い”テロワールで下層土のマルヌ由来の骨格が特徴。
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 植樹：1932～1935年 位置：標高280m、東向き 土壌：石灰と白亜質の母岩に覆われた、鉄分を多く含んだ赤土	醸造		
	○Bourgogne Aligoté -La Charme aux Prêtres ブルゴーニュ・アリゴテ ラ・シャルム・オ・プレートル			備考	Charmeとは、ブルゴーニュで、休閑地または“植物がほとんど育たない場所”を示す言葉で、表土の少ないやせた土壌。白いマルヌ（泥炭層）の、“涼しい”テロワールで、出来上がるワインは端整で緊張感を備える。
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 植樹：1949年 位置：標高280～320m、南西向き 土壌：ウミュリとコンブランシアン石灰層、牡蠣の化石の石灰岩	醸造		
	○Bouzeron ブーズロン			備考	アリゴテを偏愛するシルヴァンにとっては、長らくこの区画のアリゴテでワインを造ることが夢だった。2018VT以来買いブドウで生産をしている。「コート・シャロネーズらしい、塩味と酸味がありエレガントで、モンラッシェの中で比べるのならば、ピュリニーのような雰囲気をもっている。白い土壌で、赤い土壌のコート・ド・ニュイにはない美しさにあふれている。もし、自分のコート・ド・ニュイの白ワインの後に飲んでしまうと、ただ、軽くて、弱弱しいように誤解される恐れすらある。」とシルヴァン
	畑	品種：アリゴテ・ドレ100% 位置：コート・シャロネーズ、ブーズロン村、Les Crocellesの区画	醸造		
	○Bourgogne Blanc - Les Méchalots ブルゴーニュ・ブラン レ・メシャロ			備考	シャピートルと並び、そのポテンシャルの知られていない土壌。2010年に植えられた畑が大部分ではあるが、古いものでは1949年に植えられたブドウ樹もある。この区画の白品種からは、シルヴァンの注目する、“還元的な鉱物感”が特徴で、ピノ・ノワール向きの土壌ではないと、シルヴァンは断ずる。
	畑	品種：シャルドネ100% 植樹：2010年 土壌：深い沖積土、斜面の下側	醸造		
	○Marsannay Blanc マルサネ・ブラン			備考	BlungeysとClos du Royを含む、マルサネの5つの区画のブレンド。完熟時にピンクになる非常に珍しい品種“シャルドネ・ロゼ”を一部含む。口蓋に残る素晴らしいエレガンス、ユニークなアロマの輪郭が伺えるキュヴェ。
	畑	品種：シャルドネ・ブラン、シャルドネ・ロゼ 植樹：1949年、1951年、1989年、2009年、2012年	醸造		

	○Marsannay Blanc - Chardonnay Rose マルサネ・ブラン シャルドネ・ローズ			備考	シャルドネ・ローズと呼ばれる、しばしば、シャルドネ・ミュスカデと並び、ブルゴーニュ南部で多く栽培されるシャルドネのクローン。果実は明るい赤色をしており、少量植わっていたものをこつこつとセレクションマサルを続け、少しずつ生産量を増やしてきた。しかも、20000本/haという超高密植度。マルサネ・ブランとブレンドしてきたが、2014年からはかううじて分けて瓶詰めできるまでの量になった。
	畑	品種：シャルドネ・ローズ 植樹：1949年、2010年代 区画：オリジナルの畑はLes Blangeysの区画だが、複数の区画にセレクション・マサルで増やしている。	醸造		
	○Marsannay Blanc - Clos du Roy マルサネ・ブラン クロ・デュ・ロワ			備考	デижョンに隣接する、シュノーヴ村の畑で、マルサネ地区の中で元も北にあるリュウ・ディの一つ。その名の通り、地域の公爵が所有していた区画。グレース・リテと呼ばれる小石の堆積層で、爪くらいの大きさの小石がちりばめられている。石の多い“熱い”テロワールで下層土のマルヌ由来の骨格が特徴。
	畑	品種：シャルドネ100%	醸造		
	○Marsannay Blanc - La Charme aux Prêtres マルサネ・ブラン ラ・シャルム・オ・プレートル			備考	Charmeとは、ブルゴーニュで、休閒地または“岩が多く植物がほとんど育たない場所”を示す言葉で、表土が少なく岩がちなやせた土壌。
	畑	品種：シャルドネ100% 植樹：1965年 位置：南、南東、280～320m 土壌：石灰岩土壌	醸造		
	○Marsannay Blanc - Le Chapitre マルサネ・ブラン ル・シャピートル			備考	古くは教会の支部（=Chapitre）の所有していたとされる畑で、最初にブドウ樹を植えたのは大司教だとされる。5haの区画の内、シルヴァンは北側斜面上部を所有。18世紀まではジュヴレと並び高く評価されていた、とされるが1936年に制定されたAOCの規格からはもれてしまった。砂砂利で、カルシウムが豊富な土壌からは、優れたテクスチャーと骨格のワインが生まれるため、シルヴァンのワイナリーでの試飲でも、最後に試飲されるワイン。この畑の重要性を長年訴えてきたシルヴァンだが、2019VTからついに、INAOがこの畑の格付けを地域名格から村名格へと変更した。
	畑	品種：シャルドネ100% 植樹：1955年 位置：標高300m、東向き 土壌：石灰岩の小石、緩やかな斜面	醸造		

	● Marsannay Rosé - Fleur de Pinot マルサネ・ロゼ フルール・ド・ピノ			備考	ブルゴーニュ地方でAOC（原産地呼称）として認められた唯一のロゼワインとして知られるマルサネ・ロゼ。しかしその評価は決して高いわけではなく、シルヴァンはせっかく生産するのならば最高のものを作るべきだと考え、レ・ゾヴォンヌ・オ・ペペ、シャルム・オー・ブレートルを含む4区画の古樹のみを使い、ルージュ同様の畑作業を行い2年の樽熟成をしている。丘の下の方の区画のピノ・ノワールは豊かな果実味を与え、丘の上の方の区画のピノ・ノワールが骨格を与える。
	畑	品種：ピノ・ノワール、ピノ・グリ 植樹：1932/1934/1949年	醸造		
	● Bourgogne Rouge ブルゴーニュ・ルージュ			備考	マルサネ村周辺の買いブドウによるエントリーレベルのピノ・ノワール。すべてがバイオロジック栽培認証のブドウではないが、マルサネではコート・ドールでは珍しく、90%の畑でバイオロジック栽培が行われていて、認証がなくともシルヴァンが良いブドウを栽培していると判断した農家からのみブドウを購入。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1950～1970年代 土壌：粘土石灰質	醸造		
	● Marsannay Rouge マルサネ・ルージュ			備考	ドメーヌ所有の畑の比較的若い樹齢のブドウを使用しているが、一部古樹も混ざる。美しい赤色。色づいたタバコ、モカ、果物のクーリ、甘美なアロマ。エネルギーでいて美しい酸。アフターにやわらかなタンニンを感じる。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1950～1980年代 土壌：硬質石灰岩、白いウーライト	醸造		
	● Marsannay Rouge - La Montagne マルサネ・ルージュ ラ・モンターニュ			備考	真南向きの丘の頂上付近の畑で、日照量の多さと、涼やかな気候を併せ持つ。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 位置：標高315m、南向き 土壌：根底はほぼ石灰岩、地表は大量の明るい小石と浅い土	醸造		
	● Marsannay Rouge - En Clémenceots マルサネ・ルージュ オン・クレモンジョ			備考	なだらかな丘の底に位置する、東向きの畑。南西から常に風の吹く区画。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1985年 位置：標高282～315m、東向き 土壌：赤粘土、化石を含む泥灰土	醸造		
	● Marsannay Rouge - Clos du Roy マルサネ・ルージュ クロ・デュ・ロワ			備考	ディジョンに隣接する、シュノーヴ村の畑で、マルサネ地区の中で元も北にあるリュウ・ディの一つ。その名の通り、地域の公爵が所有していた区画。樹齢も最も高くグレース・リテと呼ばれる小石の堆積層で、爪くらいの大きさの小石がちりばめられている。石の多い“熱い”テロワールで下層土のマルヌ由来の骨格が特徴。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1956年 位置：標高268～311m、東南東向き 土壌：泥灰土、コンブランジャンの石灰岩の小石	醸造		
	● Marsannay Rouge - Les Grasses Têtes マルサネ・ルージュ レ・グラス・テット			備考	マルサネ村の真西にある丘の区画。大きな石がごろごろと転がる。少し暗いトーンで、しっかりとしたタンニンの主張を感じるキュヴェ。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1985年 位置：標高282～329m、東向き 土壌：頂上のほうはウミユリやウーライトを含んだ石の多い石灰質土壌丘の下の方には粘土質を含んだ土壌	醸造		

	● Marsannay Rouge - Les Longeroies マルサネ・ルージュ レ・ロンジュロワ			備考	36haの広さを持つ、細長い（Roies＝狭い、Long＝長い）区画。シルヴァンが畑を持つ、斜面の下部は、様々な大きさの粒子の石灰土壌がいきまじり、川底の堆積物や砂利も含む。ピノ・ノワールに最適な土地とされる。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1985年 位置：標高270～357m、南・南東向き 土壌：黄色い泥灰土を含んだ赤、茶色の粘土質	醸造		
	● Marsannay Rouge - le Chapitre マルサネ・ルージュ ル・シャピートル			備考	古くは聖堂参事会（＝Chapitre）の所有していたとされる畑で、最初にブドウ樹を植えたのは大司教だとされる。5haの区画の内、シルヴァンは北側斜面上部を所有。18世紀まではジュヴレと並び高く評価されていた、とされるが1936年に制定されたAOCの規格からはもれてしまったシュノーヴ村のクリマの一つ。砂砂利で、カルシウムが豊富な土壌からは、優れたテクスチャーと骨格のワインが生まれるため、シルヴァンのワイナリーでの試飲でも、最後に試飲されるワイン。この重要性を長年訴えてきたシルヴァンだが、2019VTからついに、INAOがこの畑の格付けを地域名格から村名格へと変更した。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1950～1990年代 位置：標高300m、東向き 土壌：泥灰土、石灰岩の小石、緩やかな斜面	醸造		
	● Marsannay Rouge - L'Ancestrale マルサネ・ルージュ ランセストラル			備考	ミルランダージュ（結実不良）のセレクションと勘違いされることが多いがそれは正確ではない。古樹であること、短い剪定、低収量、樹冠のトレサージュなど、畑の条件、管理方法からミルランダージュが起きやすいことは事実ではあるが、キュヴェの最重要コンセプトはマルサネの丘の重要三区画からの、最も古いブドウ樹のセレクションであるということ。それとは別にミルランダージュのブドウは種がない代わりに、果房も小さく、果粒が小さくなるため果皮の比率が高まることで、果汁に対する果皮の量が増える。結果的に出来上がるワインは果皮の抽出物が増え長期熟成型で表現力を備えたワインになる。
	畑	品種：ピノ・ノワール100% 植樹：1930～1945年	醸造		